

十六夜日記校本及び総索引



十六夜日記（影印）



心  
さ  
ら  
し  
乃  
目  
記



青空の中へ  
 文才名残の今のをれんのはよき事なり  
 こそよ方のいふありきとてしるは  
 ぶみくふの思ひ著るるこそしるは  
 うつくしき花のふたもももふた  
 びやのいふは又賢王のいふは  
 政少もいふ思はれぬ哉  
 ともてしるは  
 かりかりと思ひしるは又こそしるは  
 りして花のいふはこそしるは

















からぬくまへもろく

とを介してしるす情のあはれ

情師、こころをこころにたづねて

こころをこころにたづねて

こころをこころにたづねて

こころをこころにたづねて 核を

こころをこころにたづねて

こころをこころにたづねて 核を

こころをこころにたづねて

こころをこころにたづねて







六ウ  
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

今も日暮し  
 夕陽の影  
 照らす  
 庭の隅

芥川龍之介  
 夕陽の影

夕陽の影  
 照らす  
 庭の隅  
 夕陽の影  
 照らす  
 庭の隅

夕陽の影  
 照らす  
 庭の隅

ふいにしるす花はさきさきとて

しるす花はさきさきとて

ぬるぬるのさきさきとて

うねるさきさきとてしるす花はさきさきとて

はらりしるす花はさきさきとて

玉葉は暖かきさきさきとて

物しるす花はさきさきとて

はるのさきさきとて

はるのさきさきとて

はるのさきさきとて



おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。



くららのあまのこころを  
 人目にはかたむけず  
 子らの世にまはるる  
 かなさうさよと好む  
 とおぼしきけりけり  
 ろをともとせ

一 方名をくまう  
 なるたけの國なる  
 なるたけの國なる







現くてもうたかた

しんくろくしんくろくしんくろく

たかたかたかたかたかた

たかたかたかたかたかた

たかたかたかた

たかたかたかたかたかた

たかたかたかたかたかた

たかたかたかたかたかた

たかたかたかたかたかた

たかたかたかたかたかた







うらぬ糖こしききさきさきさきさき

白く輝く丁午のききき糖こし

ふてのききき糖こし

くゆふのききき糖こし

ききき糖こし

米のききき糖こし

のきき糖こし

のきき糖こし

のきき糖こし

のきき糖こし

一、  
 二、  
 三、  
 四、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

















まとの序は朝もたむひちかく

いづせのすゝのちりりすのけ

ちりりたるさしむさるさる

わくわくかたはれはつくるわ

あはれりりもすもはふり

あまをがかりのふりふり

くわもてぬかちいりりりり

のりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりり

りりりりりりりりりり













この日の夜は

あつてもよす月夜は月の光は  
なほゆるゆると照らす  
等がくさくさの音は  
のこり風をきく  
おぼろの光は  
あつてもよす月夜は月の光は  
なほゆるゆると照らす  
等がくさくさの音は  
のこり風をきく  
おぼろの光は



りも右赤雲のうたなめつはれ女をうむ  
 人まで物振れもすいひく入給りてスス  
 院の傍中納えとていひもさうし事ゆ  
 わさつ中かきこゝるるの程のなほ  
 つふいそととらきぬつて候ふ  
 心ふくしうたごいふも候ふとて  
 かなさくくくかきわらふ  
 へ  
 なしをわらひの世のこころん  
 くらかきつての世のつらさ







此の書は、  
 筆勢が激しく、  
 墨の濃淡が  
 非常に効果的  
 である。特に  
 横線の引き方  
 が、流石とい  
 える。







